『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第１６回】

前回は神による天地創造と、科学と宗教について書きました。「あぁ、そうなんだ！」と納得できなかった部分があったかもしれません。もう少し先生方のお話を聞いてください。きょうは『聖書』が〈神話〉や、さまざまな〈物語〉で書かれている意義について考えていきたいと思います。（予告した〈男と女の誕生〉については次回になります。ご了承をお願いいたします。）

《『物語る』ことの意義》

〈いのちの起源〉、〈人生の目的〉、そして〈いのちのゆくえ〉などの、私たちが生きていくうえでの根本的な問題に対する答を探していくとき、『物語』が果たす役割が大きいといわれます。それはなぜかを考えてみましょう。

片山はるひ先生によると、21 世紀になり、さまざまな分野で「物語の知」の重要性が指摘され、人間理解や心理療法における「物語る」ことの大切さが注目されているそうです。**『人間とは何か、を問うときに、計測や統計では測りきれない事実があり、それは「物語ること」によってしか表現・理解されないということが、科学的に認識されてきた』**といいます。つまり、「人間は数字では表せない」ということです。また、**『自分が誰であるかという自己同一性（アイデンティティー）も、各人が自分に語ってきかせる「物語」であると言い換えることができます』**。（自己同一性については第 12 回でも取りあげましたが、もう一度確認すると、**〈自分を取りまく環境の変化や時間の流れにかかわらず、変わらない主体性、いつも自分が自分のままであること〉**です。）　そして、**『私たちは、そのような「物語」により過去のばらばらな出来事の連続に一定の筋立て（プロット）を与え、自分の経験の中に位置づけることで、人生に意味を見いだすことができる』**のです。

以前（大学の頃でしょうか)、だれの本かは忘れましたが『私たちは過去を振り返るとき、一編の小説を書く』というような文を読んだ覚えがあります。そのときは、「ひとは過去を見つめるときに、本当にあった事と実際はなかったこと（こうあってほしかったと思ったこと）をごちゃまぜにして、フィクション（虚構）としての自分の人生をつくりあげる …」というように受けとっていたような気がします。「過去を振り返る ― ということにどんな意義があるのか。未来を見ることの方が大切なのだ。」… そんな青二才ゆえの解釈をしていました。

もし、自分の人生の歩みを数枚の〈絵〉に描いてみると仮定してください。うれしかったこと、かなしかったこと、くやしかったこと … たくさんの忘れられない日々の絵を、〈時の流れ〉がさまざまな色彩や濃淡を加えながらキャンバスに描きあげる。その絵は〈写真〉ではないので〈事実そのもの〉ではありません。しかし、描かれたいくつかの絵を見つめることにより、歩んできた人生の重さ・深さを認識し、〈いのち〉の不思議さ・かけがえのなさを畏れることを教えられ、たくさんの人たちに支えられながら生きてきたことがわかります。それが〈物語り〉の意義ではないでしょうか。それは決して

〈でたらめ〉・〈嘘〉・〈作り話〉ではありません。〈真実〉を含む『私の人生』という名の〈物語〉であると同時に、生きることの根源的問いに対する〈ひとつの答〉・〈わたしの答〉であるはずです。

《「小説」のちから》

私たちは〈小説〉というフィクション（虚構・物語）を読んで感動することが多々あります。わたしが今取りあげている遠藤氏の『わたしが・棄てた・女』も小説です。この物語は**井深八重**さんという、実在した女性をモデルにしています。遠藤氏のこころの奥深くに響いたひとりの女性の人生が、氏にこの本を書かせました。小説ですから、そこに書かれた内容はすべて〈事実〉ではありません。遠藤氏のキリスト教信仰と作家としての創造力が、彼女に関する資料を掘り下げ、ふくらませ、彩り、その生涯の中に見えた「人間らしく生きるとは？」「愛とは？」という問いに対するひとりの女性の答を、私たちに提示したと言えます。だからこそ読者に深い感動を与え、自らの人生を見つめ直すチャンスを与える小説が生まれたのです。この本を読んだ後、私たちがどのように生きていくかが問われます。

【井深 八重】 祖父が旧会津藩家老という名家に 1897 年に生まれ、同志社女学校を卒業して長崎高等女学校の教師となって縁談の話ももちあがっていた 22 歳のとき、腕にできた湿疹をハンセン氏病と診断され、富士山麓にあるカトリック系ハンセン氏病病院の神山復生病院に隔離・入院させられ、それまでの人生のすべてを棄てて堀清子という名で生活を始めることを強いられた。それが 1 年後に再検査の結果、誤診と判明する。しかしその後もその病院にとどまり、看護婦となって生涯をハンセン氏病の患者の治療と看護に尽くし、ナイチンゲール記章、ローマ教皇十字勲章などを受章し、1989 年に 92 歳の生涯を閉じている。（『遠藤周作文学全集５』月報より）

わたしの次男の名は「りょうま」といいます（漢字を「龍馬」としたかったのですが、父の反対で違う漢字になりました)。司馬遼太郎氏の『竜馬がゆく』を読んで感動し、1 ヵ月後に生まれたのが男の子だったので「これ以外ない！」と思い、名づけました。単行本にして 5 冊、文庫本にして 8 冊という大部の本を、わずか 10 日ほどで読み終えました。当時、中学校の教員だったわたしは学級通信を『海援隊』と題して発行したのをはじめ、クラブ活動は《龍馬倶楽部》を設け、部歌を作詞（曲は『阪神タイガースの歌』別名『六甲颪』を拝借)、夏休みには倶楽部員 15 名と高知・桂浜に銅像を見に行きました（よく校長が許可してくださったと思います。今の管理された教育では、まったく考えられないことです。いい時代でした。今の子どもたちは本当にかわいそうです)。それほど坂本龍馬に惚れました。

この物語は、司馬氏が「神田の古書街から、龍馬と幕末に関する本がすべて消えた」といわれるほどの膨大な資料を集め、氏の歴史観や創作力を駆使してつくりあげた大作です。「日本の歴史的人物でだれが好きか」というアンケート結果に、いつも織田信長とならんで龍馬の名が挙がるのは、いかに多くの人たち（特に男性）が彼の生き方に接し、〈男〉の夢と希望を与えてもらったかを示していると言えます。実像は当然ちがった部分が多々あったでしょう。いわば〈司馬龍馬〉に惚れたわけです。しかし、命がけで「日

本を洗濯しよう」、新しい〈国としての日本〉をつくろうという龍馬の言動は、読む人のハートを鷲づかみにします。ひとりの男の生き方が時代を超えて私たちのこころの琴線に触れ、読者一人ひとりに向けて夢と勇気と創造力による音楽を奏でてくれるからです。読者は、行間に龍馬の人生と自分を重ね合わせます。夢を見ます。夢のつづきが見たくて、「今夜はここまでにしよう …」と思っても、次のページをめくってしまう本です。これも〈物語のちから〉です。

《「いかに？」と「なぜ？」》

『夏期神学講習会』は、たくさんのすばらしい先生方との出会いの場でもあります。上智大学のほかに、東京神学大学、国際基督教大学、東京大学、南山大学などからの先生方、日本各地の教区からの司教・神父様方など、カトリック系はもちろん、プロテスタント系の大学、教会、研究所の方々のお話が聞けます。わたしが毎年楽しみにしている先生のおひとりに、光延一郎（みつのぶ　いちろう）先生（上智大学神学部教授）がいらっしゃいます。

光延先生は、**『創造の「初め」への問いは、「宇宙の初めとは何なのか？　世界と人間は、どこから、どこへ行くのか？」という、世界全体、とりわけ「私」自身の意味と意義への問いと結びついています。**（中略）　**自然科学の「いかに？」ばかりでなく、それとは別次元の「何故？」を問い続けることによって、私たちは自分の人生の由来と行く先をとらえ直し、自らの人生の主人公になっていくともいえるのではないでしょうか。**』と書いておられます。

科学は「いかに」を追い求めます。『聖書』は「なぜ」を問うことの大切さとその意義を教え、それは「私」と結びつきます。世界と人間を神がお創りになったとすれば、科学はそのしくみ・成り立ちを解明していきます。たとえば、現代医学はほんとうに素晴らしい発展をしています。〈いのち〉のしくみも次々に解明されています。 iPS 細胞による医療改革が今後さらに進み、これまで治療が不可能だった病気を治すことさえできる時代が間近です。

しかし、人間にできることはそれを発見し、応用して新しい可能性を切り拓くことであり、**〈自分の手で〉**その**〈原初の物質・形態を創る〉ことはできない**ということを自覚するべきでしょう。いろいろな物質（要素）を組み合わせて新しいものを作ることはできますが、もとになる物質そのものを作ることはできません。科学万能を信じ、人間の欲望のままに動いていくように見える現代社会の行く末を考えると、とても不安になるのはわたしだけでしょうか。2 年前の大震災による原発事故ひとつ考えてみても、人間中心、科学・経済最優先の社会が人間生活に負の連鎖を生み出すことが明らかになりました …。

さて、これまで旧約聖書の冒頭部分である『創世記』の神による天地創造について考えてきました。その際、私たちは神話的な記述の中に、人間の生の根本・根源にかかわる《真理》を読み取っていくことが大切です。私たちが〈何を大切に生きていこうと願っているのか〉 ― が問われています。

次回は、男女の性がもつ意義について考えていこうと思います。なぜ、神さまは〈おとこ〉と〈おんな〉をお創りになったのか？　男女が営む性のもつ意味とは？― を考えてみたいと思います。

【引用した書籍】

・片山はるひ**『聖書と信仰生活 ― 育てるという視点から』** 佐久間 勤 編著**『神の知恵（ソフィア）と信仰 ― 現代に生きる信仰者のための視点』**（サンパウロ、2005）より

・光延一郎 **『神学的人間論入門』**（教友社、2010）　・**『遠藤周作文学全集５ 長編小説Ⅴ』**（新潮社、1999）の中から、【解題】より、山根道公　**『わたしが・棄てた・女』**